

14	岡崎	河合中学校	ムカイ 氏名	コウタ 向孝太
分科会番号	03b	分科会名	社会科教育（中学校）	

1 研究主題

社会的な見方や考え方を働かせることを通して、よりよい社会づくりに向けた新しい価値観を実感する社会科の授業
～中学3年「地方自治と私たち」～『河合 From now プロジェクト 2025』に
私たちはどのようにかかわっていくべきか～」の実践から～

2 研究の目的

本校の河合学区では、近年、人口減少と超高齢化が急速に進行し、地域の将来に対する不安がこれまで以上に強まっている。生徒たちの間でも、「自分たちが大人になる頃に河合中学校は残っているのか」「地域のにぎわいはどうなってしまうのか」といった切実な声が聞かれ、地域の現状を課題として捉え始めている。特に秦梨小学区では、コンビニの不在といった日常生活の利便性に直結する問題がより身近に感じられ、生徒が地域の衰退を肌で感じ取る機会も少なくない。こうした環境の中で、生徒たちは「河合学区のために何か行動したい」という思いを抱えているものの、具体的な行動には至っていない。そこで、令和7年4月に地域住民約60名や学区総代、市議会議員、市役所職員が協働して立ち上げた「河合 From now プロジェクト 2025」を教材として取り上げる。会議の中では、中学生の協力を求める声も挙がっており、生徒が地域と関わる生きた学びの可能性を有している。また、このプロジェクトの特質は、地域の維持・発展を目指す住民主体の取り組みである。まさに社会科で学ぶ「地方自治」の理念を体現している。以上のことから、本研究では「河合 From now プロジェクト 2025」を通して、生徒が地域の課題を自らの問題として捉え、地方自治の仕組みや住民の主体的な参画について具体的かつ実感を伴って学ぶことを目指す。そして、地域住民の願いや思いを基盤として地方自治が成り立っていることを理解し、よりよい社会づくりに向けた新しい価値観を実感できる生徒の育成を目指し、実践を行うこととする。

3 研究主題の捉え

社会的な見方や考え方を働かせる：社会的な見方や考え方を働かせるとは、位置や空間的な広がり、時期や時間の経過、事象や人々の相互関係に着目して捉え、比較・分類したり、総合したりすることで、社会的事象を地域の人々や市民生活と関連づけて捉えることであると考え。

よりよい社会づくり：「よりよい社会」とは、そこに関わる人にとって、幸せを感じられる社会（持続可能な社会）である。そのような社会づくりのために、何が必要かを人との関わりの中で考え、自ら選択判断し、参画へつなげようとするのである。

新しい価値観を実感する：「価値観」とは、物事を判断し行動を選択する際の基準となる考え方のことであり、人や社会との出会いを通して形成されるものである。その上で、課題追究を通して得た新しい価値観をもとにこれまでとは異なる判断や行動をすることで、自分たちにも社会をよりよくできるという実感をもつことができた姿を新しい価値観を実感する姿と考える。

4 めざす生徒像

本研究実践を通してめざす生徒像は以下のとおりである。

1. 学区の課題を自分事として捉え、多様な人々との関わりを通して資料を精査し、地方自治に関わる社会の仕組みや、住民・行政・企業それぞれの役割を理解し、主体的に課題を追究する生徒。
2. よりよい社会の実現に向け、多様な立場を踏まえながら価値判断を行うことで、自分にできる行動を具体化し、新しい価値観を実感できる生徒。※行動を具体化とは、学びをもとに、何をするのか、いつ・どこで行うのか、誰と関わって行うのか、そしてなぜその行動が必要なのかを明らかにすることである。

5 研究の仮説と手だて

めざす生徒像を実現し、研究主題に迫るために、次の二点の研究仮説を設定した。

【仮説1】生徒にとって身近で、参画の必要性を感じる社会事象（地域プロジェクト）を教材化し、そこに関わる多様な立場の人々との出会いの場を設定すれば、生徒は、学区の課題を自分事として捉え、地方自治の仕組みや、地方自治における住民・行政・企業それぞれの役割を理解しながら主体的に学びに取り組み、課題を追究できるだろう。

【仮説2】毎時間、価値判断を積み重ねる学習活動を設定し、新たな価値観の獲得を促すための支援（教師の出）を行えば、生徒は地域を支える担い手としてよりよい社会の実現に向けた価値判断を行い、学びを基に自分にできる行動を具体化し、新たな価値観を実感できるだろう。

〈仮説1に対する〉手だて①：現在進行中の地域活動「河合 From now プロジェクト 2025」の教材化

「河合 From now プロジェクト 2025」を教材化し、生徒に関わりのある地域課題を扱うことで、学習内容を自らの暮らしと結び付け、自分事として切実感をもって捉えられるようにする。また、地域プロジェクトを扱うことで、学習が社会とつながっていることを実感させ、主体的に課題を追究しようとする態度を育成する。

〈仮説1に対する〉手だて②：多様な立場の人との出会いの場の設定

地方自治に関わる社会の仕組みや、住民・行政・企業それぞれの役割を理解させるために、これらの人々と出会い、話を聞く機会を設定する。それぞれの立場からの考えや思いに触れることで、地域課題を多面的・多角的に捉えられるようにする。さらに、中学生に寄せられる期待や願いを直接聞くことで、生徒が地域社会の一員としての自覚を高め、よりよい社会づくりに向けて主体的に課題を追究する姿につながるようにする。

〈仮説2に対する〉手だて③：価値判断を積み重ねる学習活動

単元を貫く課題として、「河合 From now プロジェクト 2025 は、河合学区の存続に有効なのだろうか」を設定する。毎時間の振り返りにおいて、課題に対する自分の立場を、五段階で示し、その理由を文章で記述させる。これにより、

生徒は学習内容と自らの判断とを結び付けながら、判断の根拠を明確にし、価値観を積み重ねることができる。こうすることで、地方自治の仕組みや各主体の役割を踏まえ、生徒自身が地域を支える担い手としての立場から価値判断を積み重ねられるようにする。

〈仮説2に対する〉手だて④：新たな価値観の獲得を促すための支援（教師の出）

教師は、生徒同士の関わり合いや振り返りに記述された内容から生徒の思考の状況を把握し、それに応じた発問を行う。追究の視点が一面的になった場合には、他の立場に着目させる問いかけや、資料提示など、適切なタイミングで支援を行う。こうした教師の関わりにより、生徒が学びを基によりよい社会の実現に向けて、自分にできる行動を具体化し新たな価値観を実感できるようにする。

6 単元目標と単元構想

- 1. 学区の維持・発展に関する調査活動を通して、地域社会のよりよい社会づくりは住民の努力によって実現されることと住民参加による住民自治の仕組みに基づいていると理解することができる。（知識及び技能）
- 2. 地域住民の願いや行政の働きから地域課題を見出し、まちづくりの構造の中で自らが果たすべき役割について多面的・多角的に考察し、適切に表現することができる。（思考力・判断力・表現力等）
- 3. 学区の未来に関心をもち、地域住民の一人として、行政や住民の願いを踏まえ、課題解決に向けて自分にできることを考え、意欲的に取り組もうとすることができる。（学びに向かう力、人間性等）

時	「学習課題」○学習内容 ◇資料 ・生徒の思考 ①～④ 研究の手だて	「教師の出」（手だて④） ・意図
1	「河合学区にはどのような課題があるのだろうか」 ○河合学区の現状を資料から読み取り、課題を整理する。 ◇学区の人口推移 ◇年齢別人口 ◇河合 From now プロジェクト 2025 の資料 手だて① ・どうしたらこの状況を打開することができるのだろうか。	「この学区は持続可能なのだろうか」 ・地域の現状から未来を予測し、課題意識を持たせる。持続可能性の視点を導入する。
2	「河合学区にはどのような課題があるのだろうか」 ○単元を貫く課題を考え、見通しをもつ。 手だて③ ○「存続」の定義を共有する。 ・地域の方は考えてくれているけど本当に解決するのか。 ・市やお店はどのように地域のことを考えているのだろうか。	「存続はどんな状況だろうか」 「どうすれば有効かどうか判断できるのだろうか」 ・判断基準を明確にする。 ・住民、行政、お店の視点をもつ。
単元を貫く学習課題 手だて③ 「河合 From now プロジェクト 2025 は河合学区の存続に有効なのだろうか」		
3	「河合学区ビジョンづくり協議会の方たちはどのような思いで『河合 From now プロジェクト 2025』を立ち上げたのだろうか」 ○協議会の活動内容や思いに触れ、地域の役割を理解する。 ◇協議会の方からの聞き取り 手だて② ◇協議会での資料 ・行政はどのように、河合学区のことを考えているのだろうか。	「住民の役割は何があるのだろうか」 ・地域住民の主体性や協働の重要性を理解させる。自分たちの立場を考えるきっかけにする。
4	「市はどのような思いで市の計画を立てているのだろうか」 ○中山間政策課や都市計画課の方から、市の方針や行政の役割について話を聞き、行政の視点からの考えや思いを理解する。 ◇岡崎市計画書 ◇市役所の方からの聞き取り 手だて② ・行政の方も河合学区のことを考えてくれている。 ・他の市町でのよい取り組みは何かあるのだろうか。	「行政の役割はなんだろう」 「市の計画は持続可能なものだろうか」 ・行政の視点を理解し、計画の妥当性や限界を批判的に考察する力を育てる。
5	「市や他市町ではどのような取り組みがされているのだろうか」 ○岡崎市の方針や他地域の取り組みをお話や資料から把握する。 ◇愛知県交流居住センターの方からの聞き取り 手だて② ・中学生もこのプロジェクトを考えることが学区にとっては将来的にプラスになる。	「失敗した例はないのだろうか」 「失敗から成功へ変化した例はないのだろうか」 ・他地域の事例から学び、成功・失敗の要因を分析する力を育てる。
6	「お店の維持や誘致にはどのようなことが必要なのだろうか」 ○企業の視点からの考えや思いを理解する。 ◇オカビズの方からの聞き取り 手だて② ・私たちの地域にあるお店もよりよくできるのではないだろうか。	「企業の役割は何があるのだろうか」 ・地域経済の担い手としての企業の視点を理解し、まちづくりとの関係を考える。
7	「どうすれば河合 From now プロジェクト 2025 は河合学区の存続に有効なものになるのだろうか」 手だて④ ○今までの学びを基に、自分なりの有効な方法を考える。 ・河合学区が維持、発展するための案を考えたいけど、他の級友はどんなことを考えたのだろう。	「今までの学んだことをもとに、自分は どうしたいか」 ・自分なりに地域の未来を考え、どのようにすればこのプロジェクトが有効になるのか考える。
単元を貫く課題Ⅱ 「どうすれば河合 From now プロジェクト 2025 は河合学区の存続に有効なものになるのだろうか」		
8	○地方自治や社会の仕組みを理解し、自分たちの立場を考える ◇教科書 ◇資料集 ◇これまでの資料 ・自分たちも住民としてできることを考え、行動する必要がある。	「私たちは、地方自治の構造のどこに位置しているのだろうか」 ・自分たちの社会的な位置づけを理解し、行動の可能性を考える。
9	「自分たちにはどのようなことができるのだろうか。」 手だて④ ○個人の考えを学級全体で共有・意見交流し提案を改善する。 ・級友の意見も聞いて、自分の考えをよくしたい。	「最適な判断をするためにはどうしたらいいのだろうか」 ・多様な意見を統合する。
10	「地域の課題を解決するためにはどんな内容にすべきだろうか」 ○学級全体で内容を整理・検討する。 ◇これまでの資料 ・チームで考えたことを基に、具体的に行動を考えたい。	「どのようなポイントを大切に内容を考えればいいのか」 ・自分が地方自治に参画するという意識を育てる。
11	「地域の課題を解決するためにはどのような提案内容にすべきだろうか2」 ○チームで考えたことを基によりよい内容にする。 ・自分たちが考えた要望を適切な方法で伝えたい。	「自分たちだからこそできることは何だろうか」 ・自分たちにできることは何か、思いを行動に移せるようにする。
12	「持続可能なまちを目指すためにできることはなんだろうか」 ○地方自治に関わる一員として、今後の行動を考える。 ・私たち自身もまちづくりに参画しようとする姿勢が大切である。地方自治は、地域に住む人たちの願いや思いが土台になっており、さまざまな視点で考えていくことが必要である。	「地方自治に関わる一員として、自らのすべきことは何だろうか」 ・単元のまとめとして、自分の役割や今後の行動を考える。

7 抽出生徒の実態

生徒A：学校生活に前向きに取り組み、学級の中心的存在である。これまでの学習においても、他者の意見をよく聞き、その意図を的確に理解することができる。一方で、自分の考えをもっているが授業では聞き役に回ることが多く、

考えを他者に伝えたり、議論を深めたりする場面では消極的である。そのため、自らの考えを起点として課題を追究していく姿には課題がある。本単元では、地方自治に関する学区の課題を、自分事として捉え、多様な人々の立場を踏まえながら仲間と協働して考える学習場面を設定することで、生徒 A が自分の考えを根拠をもって表現し、他者に働きかけながら課題を主体的に追究していく姿の育成を目指す。

生徒 B: 自分の意見を、根拠を示しながら他者に伝えることができ、課題に対して自分なりの価値判断を行う力も高い。一方で、自分の考えに固執する傾向があり、他者の意見を受け入れたり、多様な立場から自分の考えを見直したりすることが苦手である。これまでの学習において、資料や異なる立場を踏まえて考えを広げる姿や、自分の考えを柔軟に再構築する姿はあまりなかった。本単元では、住民・行政・企業の異なる立場に触れるとともに、適切な教師の出をすることで、生徒 B が異なる視点を取り入れて自分の考えを見直し、より妥当な価値判断へと再構築するとともに、自分の考えの変容を通して新しい価値観を実感していく姿を期待する。

8 研究の実践と結果

(1) 【学区の課題を読み取り、解決策を考える】(手だて①、④)

第1時ではまず、河合学区の「人口推移グラフ、年齢別人口ピラミッド(2020年と2050年)、児童人口グラフ」に関する資料を提示した。生徒は学区が抱える人口減少と少子高齢化という課題を読み取った。将来の予想人口を資料から読み取った生徒は「このままいくと学校がなくなるのではないか」「河合学区すらなくなってしまう可能性もある」と口にした。そこで教師はその気付きを全体で共有し、「河合学区は持続可能なのだろうか」(手だて④)と問いかけた。すると「無理な気がする」という言葉が返ってきた。そこで教師は、河合 From now プロジェクト 2025 の資料を提示した【資料1】。資料を見ながら生徒は「すごいことを大人は地域でやっているのか」とつぶやいた生徒がいたので、この言葉を利用して、「このプロジェクトは河合学区の存続に有効なのかな」と問いかけた。生徒は賛否両論の意見を活発に交錯させたため、ここで単元を貫く学習課題「河合 From now プロジェクト 2025 は、河合学区の存続に有効なのだろうか」を設定し授業を終えた。【資料2】は抽出生徒の授業感想である。生徒 A・B の下線部に着目すると、共通して地域をよくする主体を大人と捉えていることが分かる。両者とも地域の現状に対する関心や、今後への期待を示しているものの、自分たちが関わるという意識には至っていない。また、住民自治の担い手としての自覚を高めていく必要があることが明らかになった。

(2) 【単元課題の共有と「存続」の定義化】(手だて③、④)

第1時の振り返りで、生徒から「存続とはどのような状態か」という疑問が出たため、第2時ではその意見を取り上げ、「存続とはどんな様子だろうか」とクラス全体に問いかけた(手だて④)。すると、生徒の一人が河合 From now プロジェクト 2025 の資料【資料1】にある「河合学区が輝き誰もが住みたくなるまち」という目的に着目し、これを存続の姿として学級全体で共有した。

次に、このプロジェクトが存続に有効かどうかを考えるため、どのような人に、どんなことを聞くとよいかを全体で話し合う時間を設けた。生徒は多様な立場の関係者を挙げ、理由とともに意見を出し合った。その内容は【資料3】の通りであり、生徒が多角的な視点の必要性に気づき始めていることが確認できた。

誰にどのような内容を聞きたいか考えたところで単元を貫く学習課題に対する価値判断をした(手だて③)。価値判断は思考の変容を分かりやすくするために毎時間、5段階(a:かなり有効、b:少し有効、c:どちらともいえない、d:少し有効でない、e:有効でない)で表し、理由を記述することにした。【資料4】は生徒の授業感想である。なお、【資料4】以降の「価値判断(全体)」は学級全体のa~eの人数を表す。

【資料1】河合 From now プロジェクト 2025 の資料(一部抜粋)

第3条 河合地区住民が主体となって、地区の人々と共通の願を実現するため、(中略)人々が住み続けたいと願うまちづくりのための諸活動を推進し、「河合地区が輝き誰もが住みたくなるまち」を目指すことを目的とする。

グループ案 A 総務・広報 B 人口創出・拡大 C 安全・安心なまちづくり D 子育て包括推進 E 環境・農地保全 F 未来青少年育成 G 交流・つながり

【資料2】第1時の授業感想

〔生徒A〕大人たちも河合学区の地域をよくしようと考えていることがわかった。子供とは違ってかなり大掛かりなプロジェクトだった。2025年にはダメかもしれないけど、何かが来るプロジェクトをやりたいと思った。河合学区のために大人が頑張してほしい。

〔生徒B〕河合学区だけでなく、他の地域でも人口減少がみられていることがわかったし、それを改善するために大人たちが動いてくれているのでそれについていこうとすることも大切だなと思いました。栄える河合学区になるといいなと思いました。

【資料3】どのような人にどのようなことを聞きたいか	
誰に	どのようなこと
・住民	・なぜこのプロジェクトを始めたのか
・市役所	・市街化調整区域の緩和方法・環境を守る方法
・地域開発の専門家	・人口を増やすための方法・空き家対策や活用方法
・お店	・お店の勧誘方法や増やし方・インフラ計画

【資料4】第2時の感想 価値判断(学級): a1/b10/c0/d2/e4

〔生徒A〕価値判断d(少し有効ではない) (資料1中)プロジェクトのA~Gの活動内容の中では、特にGはいい内容だと思うけど、現実的にこの内容をずっと続けることが可能かと言われたらそうではないと思うし、人口を増やす過程で空き家を活用するとあるけど、空き家を活用してどうやって人口を増やすのかとかまだまだこの内容だと有効ではないと思った。

〔生徒B〕価値判断b(少し有効) 市民の意識がまず大切だと思うからよくしたいという思いをもち、このプロジェクトを開いてよくしようと思うことが第一歩だと思う。インフラ整備やお店を建てるなど都市化に近づくことも大切だけどその中でも環境にも配慮することを頭に入れて行動しなければいけないと思った。若い人が増えて、家族が増えるといいなと思った。

生徒Aの「プロジェクト(中略)いい内容」から、資料から内容を読み取り、比較、検討していることがわかる。

生徒Bの「市民の意識がまず大切」からは、多面的な考えの必要性を感じていることがわかる。

(3) 【聞き取り調査】(手だて②③)

【資料3】のリストに沿って、第3時から第6時において、河合学区ビジョンづくり協議会会長(以下蒲野氏)、岡崎中山間課・都市計画課、愛知県交流居住センター、オカビズ所長と4つの立場(住民、市役所、地域開発の専門家、お店)の方からそれぞれ1時間ずつ話を伺った。毎時話の後には単元課題について価値判断する場を設けた(手だて③)。

【資料5】は聞き取り調査の概要と生徒の感想である。

【資料5】聞き取りの様子

第3時 蒲野氏の話の概要

- ・一番大切なのは地域の声である。だからこそ、地域の声を市に訴えていくことをしていきたい。
- ・行政に訴えて、取り組んでいくことはとても大変であり、難しいことである。しかし、地域の仲間がいる。だからこそ諦めたくない。また、みんなが河合学区に残ってくれるような地域を目指したい。そして、みんなが参加してほしい。自分もこの先があるわけではないので、思いを引き継いでほしい。

[写真1] 蒲野氏からの聞き取り



第3時の感想 価値判断 (学級) : a1/b11/c0/d0/e4	
〔生徒A〕 価値判断 e (有効でない) 今までは市から言われたことを一方的にやっている現状だったので、河合学区から市に要望を訴えていくことの必要性がわかった。しかし、市街化調整区域を外すことは簡単ではないと思うし、<u>行政の壁もあるので、本当に自分たちの思いが実現できるのだろうか</u>と思った。<u>若い人がこの会に入ってやっていくことが必要だ</u>と感じた。蒲野さんが河合のために積極的に動いてくれてありがたいと思ったし、河合学区みんなで変えていくことが大切だと思う。	〔生徒B〕 価値判断 b (少し有効) このプロジェクトの参加人数が70人も捉えるか70人しかと捉えるかによって価値判断は変わってくるけど、<u>たくさんの層の人たちが参加して気持ちを高めることで地域を活性化させる道がひらけてくる</u>と思う。また、よくしようという気持ちをもっていることが有効につながるのではないと思う。
第4時 岡崎中山間課・都市計画課の話の概要	
- 市としては、岡崎市民全員が幸せになる街づくりを目指している。それは、岡崎市都市計画マスタープランを基に作成している。河合学区は市街化調整区域である。河合学区は自然豊かであり、それを岡崎市としては守っていきたい。現状としては、市街化調整区域の変更はない。 - 地域住民として大切なことは、いろいろな世代の方が、どのような学区にしていきたいのか、そして行動していくことが大切。それぞれの学区で考えていくことが必要。 - 誰が進めていくのかというのは基本的には住民の思いや考えである。市が中心ではなく、住民が作り上げていくもの。中学生の意見も反映できると地域の意見としてよりよくなる。	〔写真2〕市役所の方からの聞き取り 
第4時の感想 価値判断 (学級) : a0/b5/c3/d1/e7	
〔生徒A〕 価値判断 d (少し有効ではない) 現状では、市街化調整区域を外すことができないことがわかって、調整区域を外すことができないなら河合学区に住みたい人が住めないから from now プロジェクトは有効ではないと思った。また、誰でもいいから<u>人口を増やしたいなら簡単かもしれないけど、はたらの自然が壊れる可能性もあって、ただ人口が増えればいいのかも考えたい</u>。また、そもそも河合学区にきたいと思う人が現実的にいるのだろうかと思った。来てもらうためにどんな地区にすればいいのか考えていきたい。	〔生徒B〕 価値判断 e (有効ではない) 空き家を減らすために行う対策もあるけどそれを行えば、私たちの目標や理想に近づくかといわれれば微妙だなと思った。私たち住民が河合学区を魅力ある地区にしてそれを伝えていくことが市に頼るよりも大切なのではないかなと思った。また、自分たちが河合学区をよくしていくことを諦めたらそれで終わってしまうので、少しでも希望をもって活動に取り組んでいくことが大切だと思った。
第5時 愛知県交流居住センターのお話の概要	
- 地域住民の思いが重要である。みなさんも地域住民の1人であるから、何かできるかもしれない。 - 河合学区は市街化調整区域である。河合学区は、全国的にはもっと深刻な過疎化が進んでいるところと比べるとまだましである。 - 市街化調整区域でも、条件はあるが特例で集落維持制度という制度を使えば、家が建てられるようになる。ただし、地域主体で計画を立てる必要がある。 - 地域住民が主体となった、地域のビジョンが大切。もちろんそこには皆さんも含まれている。制度はあくまでも制度である。中学生として、地域の一人として、何ができるのか考え、行動してほしい。自分が将来、河合学区にいたいと思えるような地域にしていけることが大切。	〔写真3〕愛知県交流居住センターの方からの聞き取り 
第5時の感想 価値判断 (学級) : a1/b12/c2/d0/e1	
〔生徒A〕 価値判断 a (かなり有効) このプロジェクトがないと集落維持制度ができないからこのプロジェクトは有効なのかなと思った。<u>中学生ができることは、大人と違うけど、ごみ拾いや挨拶、高齢者の手伝いなど簡単なことはやれる</u>と思った。僕たちが大人になったときに、河合に残ってもらえる行動をしていくことが大切だと思った。	〔生徒B〕 価値判断 b (少し有効) やっぱり私たちがこの地域に希望をもって取り組もうとする姿勢が大切なんだと思った。自分がされて嬉しいことは他人もされて嬉しい。そのことを生活でおこる些細なことでもいいから思い出して将来のビジョンにつなげていくことが大切だと思った。<u>地域住民が明るい未来を想像して、行動を起こし、見える化していくことが大切だ</u>と思った。
第6時 オカビズ所長の話の概要	
- 何にもないと思っているのが実は資源がたくさんあることを知ってほしい。 - 見方を変えるためにリフレーミング (ほめる) で河合を考えてみる。 - 河合には魅力がないのではなく、視点を変えるとたくさん良いところがある。伝えれるのはみんなである。 - 地域を変えられるのは、地域に住む人だけ、みんなもこの河合学区の地域の一員である。みんなが変わると地域も変わることができる。	〔写真4〕オカビズ所長からの聞き取り 
第6時の感想 価値判断 (学級) : a2/b10/c1/d0/e2	
〔生徒A〕 価値判断 a (かなり有効) 河合だけにしかないところを観察していいところを見つけていきたい。何にもないところではなく、ここにしかないという考えをすることで見えてくるものがある。今までは法律で市街化調整区域があって家を建てられないから希望がないなと思っていただけ、ホテルやアウトレットに来たついでとかでもいいから河合学区に来てもらうチャンスがあるのではと思った。	〔生徒B〕 価値判断 b (少し有効) 地域を考えるとときにポジティブに置き換えて可能性を広げていくことが大切だと思った。何事も諦めない気持ちが大切だと思った。中学生だけで考えを止めずに地域に広めていくことが大切だと思った。

第3時から第6時にかけて、生徒Aは価値判断を e→d→a→a、生徒Bは b→e→b→b と変化させており、学習を通して考えが動いている様子が見られた。第3時では、生徒Aは「行政の壁もあるので、本当に自分たちの思いが実現できるのだろうか」と述べ、制度的制約への不安を示す一方で、「若い人がこの会に入ってやっていくことが必要」と住民自治への期待も表している。また、生徒Bは「たくさんの層の人が参加して気持ちを高めることで地域を活性化させる道がひらけてくる」と記述し、住民参加の広がり可能性を見いだしていた。第4時では、行政の話を受けて価値判断が消極化し、生徒Aは「調整区域を外すことができないなら河合学区に住みたい人が住めない」「人口を増やしたい(中略)自然が壊れる可能性」と述べ、制度と環境の両立の難しさに気づいている。しかし第5時では、交流居住センターの話を通して状況が転換した。生徒Aは「中学生ができる(中略)簡単なことはやれる」と記述し、ごみ拾いや挨拶など具体的な行動を挙げ、住民自治の中に自分を位置付けて捉えるようになった。また生徒Bは「地域住民が明るい未来を想像して、行動を起こし、見える化していくことが大切」と述べ、行政依存から住民主体の考えへと転換している。第6時では、生徒Aが「河合だけにしかないところを観察していいところを見つけていきたい」、生徒Bが「地域を考えるとときにポジティブに置き換えて可能性を広げていくことが大切」と記し、地域を再評価(リフレーミング)の視点を獲得している。以上より、第5時で生徒が前向きになれたのは、市街化調整区域などの制度的制約がある中でも、集落維持制度のように、地域主体であれば活用できる可能性があることを知った点である。これにより、制約＝不可能という捉え方から、条件付きではあるが実現可能であるという認識へと転換した。4時間のゲストチャーによる講話を通して、生徒は住民、行政、企業それぞれの立場から地域課題に対する考えや思いに触れることができた。その結果、生徒は地域課題を多面的・多角的に考察し、各主体の役割や責任を踏まえながら、河合 From now プロジェクト2025について自分なりの根拠をもって価値判断を行うことができた。

(4)【これまでの学びを統合し個人提案を形成】(手だて④)

価値判断 (学級) : a2/b10/c3/d0/e1

第7時では、【資料6】「自分たちも有効になるために考えたい」という発言をもとに、「どうすれば河合 From now プロジェクト 2025 は河合学区の存続に有効なものになるのだろうか」(手だて④)と問いかけた。すると生徒が「河合 From now プロジェクト 2025 を有効にするために必要なこと」について自分の立場から提案すべきことを考えたいと述べたので考える時間を確保した。提示された意見【資料7】には、様々な考えが示された。これらの提案は、住民・行政・企業の協働によって地域が維持されるという地方自治の構造認識に基づき、生徒が自ら考えたものである。価値判断の分布 (a2/b10/c3/d0/e1) からは、生徒の多くがプロジェクトの「有効性」を肯定的に捉えていることがわかる。また【資料8】にあるように生徒A「1人1人が自分のなっほしい河合学区を想像して行動していくことが大切」や生徒B「家族間や地域の人同士で話題にあげていくことができる」といから実現には住民の主体的な行動が必要であると理解していることがわかる。さらに、生徒Aは「みんなで協力して集落維持制度を使うことができれば、他の人が河合に来てくれると思った」と考えており、行政制度を単に事務的な仕組みとして捉えるのではなく、住民が制度を主体的に活用することによって地域の将来が左右されるという地方自治の本質を捉えている姿と言える。

(5)【地方自治の構造理解と参画の具体化】(手だて④)
前時での個人の考えや価値判断の理由を見ていく中で、考えの深まりを感じた。そこで、地方自治の構造を視覚的に生徒が認識できるように教師の出を行った。
【写真5】このように社会構造を明確化することができた。さらに、行動を具体化させるために次の教師の出(手だて④)【資料9】をした。それぞれのチームで考えたことは、【資料10】である。社会構造を認識しながら、自分たちができることを考え、行動に対しての要望先を適切に判断することができた。生徒の振り返りは【資料11】である。生徒Aは「自分達が小学生と高齢者をつなぐイベントを考えたい」地域に向けた実践的な行動を構想する姿を見せた。生徒Bもまた、「自分が河合 from now プロジェクトの会議に参加したい」「家族に今日の授業でしたことを伝えたり、地域の行事に参加したりしたい」と身近な行動から参画しようとする意欲を示した。これらの記述からは、単元当初にみられた受け身の姿勢が、自分たちが地域をより良くするために行動する主体であるという自覚へと確実に転換していることが読み取れる。

(6)【提案改善のための意見交流】(手だて④)
前時に考えたことを適切な行動に移すために、「みんなが考えたことって、自分たちでできるの」という発問を行った(手だて④)。すると【資料12】のようにできるところとできないことをより明確にして、できないことをできるようにするためにどのようにすればいいか考え、整理することができた。自分たちにできるところと自分たちにできないことを分類することで、より行動を明確化することができ、自分がどんな行動をとるべきか思考を整理することができた。【資料13】のように生徒Aは「中学生だから何もできないと思っていた」という以前の受け身の姿勢から、住民や関係者と協力することで「できないと思っていたこともできる」と認識が転換している。さらに、「このプロジェクトを自分ごととして捉え、率先してやっていきたい」という記述から、学区の課題を自分事として捉え、よりよい社会を作っていこうとする姿が読み取れる。生徒Bも「大人だけが動く」と任せてしまう」という自分の姿勢を振り返り、中学生が行動することで周囲にも影響を及ぼせると考えるようになっていく。これは、自分たちも地域の一員であるという意識を示しており、よりよい社会を作っていこうとする姿が読み取れる。

【資料6】第7時の授業記録

T1	「いろいろな立場の方からお話を聞いてきたけど、これからどうする」
C1	「これからの河合について考えたい」
C2	「自分たちも有効になるために考えたい」
C3	「河合のためになるプロジェクトにしたい」
T2	「では、どうすれば河合 From now プロジェクト 2025 は河合学区の存続に有効なものになるのだろうか」

【資料7】どうすれば有効になるのか学級全体の意見の一部

・キャンプ場を作る。・河合にしかできない体験会の企画をする。・河合の魅力伝えるためのイベントの開催や SNS を使った広報をする。・高齢者と子供と一緒に活動することの企画をする。・集落支持制度を使った移住の促進。・空き家の活用。
--

【資料8】第7時の振り返り

【生徒A】価値判断b みんなで協力して集落維持制度を使うことができれば、他の人が河合に来てくれると思ったから、河合のみんなと協力してやるのが大切。自分で有効な手立てを考えてみたけど、本当に実行できるかはわからない。だけど、1人1人が自分のなっほしい河合学区を想像して行動していくことが大切なのではと思った。
【生徒B】価値判断b 河合学区の人がまずはこの現状を知ることが大切だと思う。だから家族間や地域の人同士で話題にあげていくことができるといいなと思った。小さなことでもいいから行動を起こしていくことが、存続に繋がっていくと思う。

【写真5】社会構造を認識するための板書

【資料9】第8時の授業記録

T1	「これらはどんな立場ですか」
C1	「河合の住民」
C2	「市」「行政」
C3	「企業」
T4	「これらはどんな関係ですか」
C4	「関わり合っている」
C5	「それぞれに役割がある」
C6	「それぞれがなくてはならない」

【資料10】それぞれのチームで考えたことの一部

<有効にするための行動>	<要望先>
学区の全員が参加する会議	住民
SNS で地域の魅力を発信する	住民 (プロジェクトの人や自分)
高齢者でも歩いて行ける店	企業
道路をきれいにする	住民、企業
集落維持制度の活用	住民 (プロジェクト) → 行政 (市)
学区でのイベント	住民 (自分)
河合への移住促進	住民 (プロジェクト) → 行政 (市)

【資料11】第8時の振り返り

【生徒A】高齢者も子供も住みやすい河合学区にしていきたいと思った。(中略)自分達が小学生と高齢者をつなぐイベントを考えたい。また、内容によっては、蒲野さんに相談をして、岡崎所に訴えてもらうことが必要だと思った。その際には、必要性を感じる資料を用意したり中学生の自分たちだからこそその意見を考えたりしたいと思う。
【生徒B】まずは、自分が河合 from now プロジェクトの会議に参加したいと思った。また、家族に今日の授業でしたことを伝えたり、地域の行事に参加したりしたいと思った。私たちができる小さな一歩を踏み出し、積極的に行動していきたいと思った。

【資料12】提案内容の整理の一部

自分たちにできること	自分たちにできないこと
・プロジェクトへ参加する。 ・蛍の世話を学校でする。 ・プロジェクトを知らない人に伝える。 ・SNS を使用し、河合の魅力を伝える。 ・イベントを企画して提案する。 ・チラシの作成。	・市街化調整区域を外す ・集落維持制度を使う。 ・大掛かりなイベントの準備や人集め。 ・新しい道や、公共交通機関を増やす。

【資料13】第9時の振り返り

【生徒A】全部の年齢層の視点を考えてプロジェクトを進めていくことが大切だと思った。中学生だから何もできないと思っていたけど、蒲野さんと協力したらできないと思っていたことも全部できることがわかった。これからは、このプロジェクトを自分ごととして捉えてプロジェクトを率先してやっていきたい。
【生徒B】大人だけが動いていると任せればいいのかやになってしまふけれど私たち中学生が動き出せばもっと多くの人たちが動かせることにつながると思う。だから、蒲野さんに意見を伝え、自分たちにできることは行動に移していけるといいなと思った。せっかく話したことを無駄な時間にならないようにこれからしていきたい。

(7) 【学級提案→行動→まとめ】

地方自治における社会構造を理解した上で、自分たちの役割を自覚した。その後、自分事としてこのプロジェクトに関わるために内容を話し合った。【資料12】の自分たちにはできないことは要望し、できることは自分たちで行動することを念頭に置き、活発な議論の元、4つのチームに分かれ、内容を考え、実際に行動をした【資料14】。その後、持続可能なまちづくりを目指してどのようにかわっていくかを考えて単元を終えた。【資料15】から生徒Aは、「大切なのは、その町に住んでいる人の思いや意見であること。そしてその思いを行動していくことが大切」と述べている。この記述からは、地方自治が制度によって自動的に機能するものではなく、住民一人一人の意思と行動によって支えられているという認識に到達していることがうかがえる。また、「自分にできることは自分でやり、周りに普及させ、続けていくことが大切である」と述べている点から、授業だけの取り組みではなく、住民として捉えていることが読み取れる。さらに、「地域住民として高齢者の方を意識して行動したい」と記しており、地域社会を構成する多様な世代を意識した視点へと広がりが見られる。生徒Bは、「町を動かすのは自分たちの思いが大事で、住民一人一人が地区の問題について考え、意見を出し、参加することが大切である」と述べている。この記述は、地方自治の根幹である住民自治の理念を的確に捉えている。また、「実際に住んでいる我々世代で街を起こしていき、それを次の世代につなげていくことが大切」と述べており、住民としての責任と、将来世代への継承という視点を含んだ認識に到達している。さらに、「自分たちで地域を存続させたいと思う気持ちが大切である」と記したことから、地域の存続を他者任せにせず、自らの意思と行動に結び付けて捉えていることが明確となった。以上のことから、生徒が地方自治の構造を理解した上で、住民としての立場から地域課題に向き合い、意見形成から行動へと至る一連の過程を経験したことが確認できる。生徒の言葉には、地方自治が住民の意思と行動の積み重ねによって成立するものであるという理解が一貫して表れており、本単元を通して、地域住民の願いや思いを基盤として地方自治が成り立っていることを理解し、よりよい社会づくりに向けた新しい価値観を実感することができたといえる。

【資料14】実際にいった行動

（蒲野氏への要望）

- ・空き家対策の一環として集落維持制度の活用をお願い
- ・河合学区の住民間のつながりを増やす、中学生が考えるイベントの企画案の提出

（自分たちの行動）

- ・小学生や中学1、2年生へプロジェクトの紹介と河合学区の行事の呼び掛け
- ・河合学区の魅力を伝えるためのチラシ作りと回覧板での広報

【資料15】単元終末の感想（一部抜粋）

【生徒A】大切なのは、その町に住んでいる人の思いや意見であること。そしてその思いを行動していくことが大切である。その中で、自分にできることは自分でやり、周りに普及させ、続けていくことが大切だと思った。この単元を通して、今までは高齢者のことを何も考えていなかったけど、地域住民として高齢者の方を意識して、行動したいと思った。

【生徒B】国で見ると国会や内閣が中心に日本を動かしている。県は県、市は市、町は町で動いている。町を動かすのは自分たちの思いが大事で、住民一人一人が地区の問題について考え、意見を出し、参加することが大切である。今実際に住んでいる我々世代で街を起こしていき、それを次の世代につなげていくことが大切。そして自分たちで地域を存続させたいと思う気持ちが大切だと思った。

9 実践の考察

（1）手だて①「現在進行中の地域活動「河合 From now プロジェクト 2025」の教材化」の有効性

手だて①では、実際に地域で進行しているプロジェクトを教材化したことで、生徒は地域課題を自分事として捉えることができた。第1時の生徒Aは「河合学区のために大人が頑張ってもらいたい」【資料2】と考えていたが、単元終末では、「大切なのは、その町に住んでいる人の思いや意見であること。そしてその思いを行動していくことが大切である。その中で、自分にできることは自分でやり、周りに普及させ、続けていくことが大切」【資料15】と考えるようになった。自らを地域社会の一員として意識するようになった結果であると考えられる。以上のことから、手だて①は、生徒に切実感をもたせ、地域課題を自分事として捉え、主体的に学びに取り組むことができるようにするうえで有効であった。

（2）手だて②「多様な立場の人との出会いの場の設定」の有効性

手だて②では、多様な立場の人との出会いを通して、地域課題を多面的・多角的に捉える姿が見られるようになった。特に、「行政の壁もある」【資料5・第3時】といった記述や、「自然が壊れる可能性もある」【資料5・第4時】といった発言からは、制度上の制約や価値観の対立など様々な視点から考えることができ、地方自治における各主体の役割を理解しながら課題を追究することができた。以上のことから、手だて②は、多様な立場の役割を理解し、主体的に課題を追究する力を育成するうえで有効であった。

（3）手だて③「価値判断を積み重ねる学習活動」の有効性

手だて③では、単元を貫く学習課題を設定し、毎時間価値判断を行ったことで、生徒の思考の連続性を確保した。価値判断の推移を見ると、生徒A・Bどちらも判断を行き来しながら最終的に肯定的な判断へと至っている。生徒Aは「集落維持制度を使うことができれば」【資料8】と述べ、生徒Bは「現状を知ることが大切」「小さな行動を続けることが必要」【資料8】と述べ、判断の基準を具体化させている。以上のことから、手だて③は、社会の仕組みや各主体の役割を踏まえ、判断の根拠を明確にしながら価値判断を行ううえで有効であった。

（4）手だて④「新たな価値観の獲得を促すための支援（教師の出）」の有効性

手だて④では、教師の発問や社会構造の可視化により、生徒は地方自治における住民・行政・企業との関係を理解し、自分の立場や役割を明確にすることができた。【資料9・写真5】。生徒が「誰に」「何を」「どのように伝えるか」【資料10・12】を考え、実際に協議会への要望や広報活動【資料14】につなげたことで、単元終末の感想【資料15】生徒Aの「自分にできることは自分でやり、周りに普及させ、続けていくことが大切である」という記述や、生徒Bの「住民一人一人が考え、意見を出し、参加することが大切である」という考えになった。以上のことから、手だて④は、生徒が学びを基によりよい社会の実現に向けて、自分にできる行動を具体化し新たな価値観を実感できるようにするうえで有効であった。

10 おわりに

本授業実践後には、協議会への参加や地域行事への参画など、地域活動に主体的に関わり続ける生徒の姿が見られた。このことは、本実践を通して育まれた自治意識や社会参画への意欲が、授業終了後も継続的に発揮されていることを示していると考えられる。一方で、全ての生徒が同じように主体的に参画できたわけではなく、地域課題への関心や行動に個人差が見られ、継続的な社会参画に結び付けるための支援について課題が残った。今後も、社会的な見方・考え方を働かせながら、よりよい社会づくりに向けた新しい価値観を実感する社会科授業の実践を追究していきたい。